

佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

頼られ甲斐

施設で働く皆さんへ

里見 吉英

「あなた方お金をもらっている
んでしょ。」

こんな言葉を聞かされたことは
ありませんか。私たちは商品を
売るサービスではなく、生活する
うえで困難を抱えている人に行
うアドバイスをしています。これ
らを総称して支援といっています
が、商品のように、お互いの納
得済みで商行為(お金のやり取り)
をしているわけはありません。
契約で支援の考え方や具体的な
方法を説明しても、日常生活の
全ての場面でこうしますとは書
面に書ききれませんし、たとえ
書いても、日によって支援の程
度も変わります。同じ方法でも
支援者が変われば受け取り方も
変わります。人と人との間に介
在するいろいろな要素で反応は
まちまちです。支援者が男性か
ら女性に替わった瞬間、拒んで
いた衣類の着替えもスムーズに
なったりします。事務処理は約
束事で結果を見ることはできま
すが、日々の支援はその時々
の行為として一般の商品とは異
なっています。

すから、想定外のことが起こり、
苦情の原因にもなっています。
契約書はこの施設も似たり寄
つたりの内容でなし、利用する
側は、建物など生活環境以外は
評判や、現場の様子を見学する
ことで判断せざるを得ません。
一方で私たちは、拒むことはでき
ないという心もたない形でスタート
していることになります。大筋合
意ですから、思惑違いもあつて不
思議ではありません。

お金を貰っていることは最近
始まったことではありませんし、
原資は税金であることも変わりま
せん。直接の苦情はあつてもお
金という言葉はあまり聞いたこと
ありませんでした。たぶん社会福
祉法人も株式会社と同一視される
ようになって来たのでしょうか。お
金を払っているのに・・・とい
う話かもしれない。こうした変
化をどう考え、制度転換にどう対
応していけばよいのか。捉え方に
よっては組織そのものに影響を
与える重大なことなのです。「社会的
使命」これも社会福祉法人にとつ

ては切り離せない言葉ですが、株
式会社であつても同様です。これ
が一般に受け入れられない場合、
業務として成り立たないこともあ
ります。社会貢献は形こそ異なり
ますが、会社のイメージアップ戦
略の一つです。こう考えてくると
ビジネスになったから一概にダメ
とも言えません。利用者の満足度
でどちらが良いかという判断に委
ねられるだけです。ただ考えてお
かなければならないのは、税金が
いつまで持つのです。現在は事業
者を増やしサービスの量を確保す
るという目的がありますが、これ
がある程度充足してくると、たぶ
ん国は報酬の蛇口を絞ります。そ
こで競争を生き抜くためにはサー
ビスで勝つか人件費を削るしか
なくなるでしょう。そうすると職
員の確保が更に難しくなります。
今起こっている利用者確保の現象
は、それらの予兆とは考えられない
でしょうか。利用者の確保という
状況は一昔前では想像もできま
せん。



福祉の現場で働いている人は
多様な事業体に及びますが、共通
するのは人が人にアプローチを
するという根源的なことです。そ
して残念ながら必ずミスをし
ます。そのときの対応をどうする
か。不信感にならないためにも、起
こってしまったら正直にすべてを
開示すること、不明なことを整理
して当事者にも行政にも報告する
こと

です。ガバナンスという堅苦し
いですが、チームワークがしっ
かり取れているかどうかです。人
絡んだシステムの問題か、それ
も能力の問題か。自分のチーム
の個人的スキルとチームの総合
力を把握していないと思わぬ
ところを把握することになりかね
ません。情報を出し合ひしてい
なければ日々の業務は進みませ
ん。進まないどころかトラブル
につながることは皆さん経験済
みのことです。



物言わぬ利用者と言えぬ家族
がいます。時には言い過ぎて職
員を辞めさせる人もいます。言
えぬ人を土台に仕事をしています
という意識が大事なことです。そ
の謙虚さと熱意を持たないとこ
の仕事はできません。何とかし
てあげたいという気持ち、無理
が誘いをかけてくるのが福祉の
魔力でもあるのです。特に相談
業務の人は、相談者の課題解決
に当たってそんな状況になるの
は至極当然のことです。でも、そ
こには落とし穴があります。独
りよがりになつてはいないでし
ょうか。その熱意にほだされ
ると、受け入れる側の現場は
合意形成のないまま流される
危険があります。最後まで責任
をもてるのか、自分たちの力で支
えきれるかどうか。できないこ
とは無理をしないことが身を
守る術なのですが、いつも葛藤
が生じます。受け入れるべきか
否か。こんな例がありました。
自閉の非常に強い利用者でし
た。自分で毛という毛を剃つて
しまつたり、食後は地域の民
家の庭の上で昼寝することに拘
ることも。あるときは自動火災

報知機を鳴らすことに夢中にな
つたり、新しい建物のガラスを
すべて割るまで納得しなかつた
り、特異なことわり随分と翻弄
させられました。一泊旅行の時
は、旅館の壁にある自動火災報
知機を見つけれないよう到着
後すぐに紙で隠してから旅館に
入るようになければならな
いでした。でもご両親に大変
かわいがられ、いつも自分より
小柄なお母さんに寄り添つて
鼻声で名前を呼んでいました。
ハゲ頭の一見、極道にしか見え
ないような男性が幼児のように
母親に抱きつく姿は滑稽で微
笑ましい映像として記憶に残つ
ています。しかし、ある時作
業中に居眠りをしてイスから
落ちてしまつたのです。直後は
「ビョウイン、ビョウイン」と
いつて走り出したらしいので
すが、頭の打ち所が悪かつた
のでしょう。私が病院に駆け
つけた時はすでに亡くなつた
後でした。施設の管理下で起
こつたことでしたが、責任を痛
感しました。ところが父さんの
第一声が「ふる里学舎で本
当に楽しく過ごさせてもらつ
てありがとうございませう。お
母さんも泣き崩れていました。
」お母さんも泣き崩れていま
した。現場にいた職員を氣遣
つてくれたのです。

職員を何度も困らせながらも
かわいがられていました。お母
さんには、「またガラス割りました。
」「トイレ詰まりました。」など
悪さの情報ばかりお伝えしな
ければならなかつたのですが、
「またですか。いつもすみませ
ん。」といながら彼を受け入れ
ていました。愛されていること
が分かつてからこそ職員も安
心感がありました。彼は亡くな
つてしまいました

が、私たちの仕事を信じてくれ
ていたことは大きな自信とな
っています。命を預かっている
以上、事故は防がねばなりません。
取り返しのつかない事態への
危険は日常のいたるところに
転がっています。予見できるこ
とは今やらなければならない
のです。



契約の時代から、ちよつとし
た言葉や連絡帳の文字から信
じていただけていないのでは、
と不安になつてはいませんか。
職員も利用する側も不安なま
まという状態があるとすれば
早期に解決すべきです。他人
の幸せは分かり易いですが、
悩み、苦しみは見えませ
ん。信頼関係は相互の作用
です。何らかの糸口がある
はずですが、しかし、共感
することだけでは、身が持ち
ません。「ありがとう」の一
言や笑顔にこの仕事を選ん
でよかったと思う一瞬がある
のです。施設職員へと副題に
していますが、この点につ
いては、保護者の皆様に伝
えたいところでもあります。
福祉の世界も難しい環境です。
人生どこで転ぶかわかりませ
ん。職員も頼りになる人は必
ずいるでしょう。いざとなつ
たらあの人がいるという安心
を求める気持ちには利用者
があなたに期待していること
と同じはずですが、頼られる
ことを意気に感じましょ
う。
(佑啓会 理事長)

今年も厚生労働省新規採用職員六名の方が三日間の研修に来られました。(市原・和田浦各三名) 研修を終えての感想を寄せて頂きましたので、ご紹介させて頂きます。

四月十五日から十七日にかけて二泊三日、ふる里学舎の方で厚生労働省新規採用職員向け施設内研修に参加させて頂きました。

この研修は福祉サービスの実習を通じて福祉行政の推進に資する識見や使命感を涵養するため毎年行われているもので、今回も千葉県内に所在する二十五カ所の施設に一名から四名程度の新規採用職員が派遣されました。

二泊三日の短い期間の研修ですが、福祉の現場で活動されている方の考え方や問題意識について、深い部分を共有することは難しかったかもしれません。しかし、施設の方との対話や工芸科、園芸科での実習、障害者雇用施設の見学などを通じ貴重な体験を積み重ねることができ、私自身学ぶことが多くありました。



障害者という言葉でイメージされるのは、「支えられる存在」といったどこか受け身なものでしたが、利用者の方は実際には多様な活動に元氣よく取り組まれています。

また、一緒に活動していて感じたのですが、本当に純粋で素直な方ばかりなので、自分自身が大きなエネルギーをいただいているような気持ちにさせられます。もちろん、現実には人間関係の問題が生

じたり、日常的にトラブルが生じることがあることとは思いますが、施設全体がとても明るく、利用者の笑顔が素敵で、職員の方が自分の仕事に誇りと愛着をもっているという事実を感じたことで、障害者福祉における明るい展望を私は感じました。

昨今の国の行政は不安定で見通しも不確実、福祉行政を含めた社会保障行政は間違いなく大きな変化は避けられないと思います。たとえそうであっても、こうした現場の方の想いと行政組織との協力関係があれば、よい福祉制度を持続させることは必ずできると感じました。

研修を受け入れてくださったことへ深く御礼を申し上げ、佐啓会の今後の益々の発展をお祈り申し上げます。

(厚生労働省 上島大和さん)



私は一日目と二日目に和田浦、二日目の夜から三日目に市原の施設にて研修に参加させて頂きました。まず始めに、簡潔に三日間を振り返ろうと思います。

一日目では、和田浦の施設見学及び入浴介助をさせて頂いたり、着せたり、人の服を脱がせたり、着せたり、頭を洗うといった経験は初めてのことで、全くとお役に立てず、自分の無力さを痛感しました。しかし、利用者さんたちは無力な我々を毛嫌いすることなく、無邪気な笑顔

で話しかけてくれました。みんなでお喋りしながらの食事は本当に楽しかったです。

二日目は作業科の体験に参加させて頂きました。ここでも自分の無力さを感じました。一方で利用者さんたちは、生き生きと手際よく楽しそうに作業をしており、やはり社会の中では「役割がある」ということは重要なのだと感じました。

三日目は、佐啓会の姉崎や木更津の事業所を見学させて頂きました。パン工房でも利用者さんは明るく元気に作業をしており、またグループホームが非常にきれいなのが印象的でした。



この三日間を通して一番考えたことは、「世のため人のために働くとは何か」ということです。私は自身や家族の病気の際にたくさんの人に支えられた経験から、将来困っている人のために働きたいという思いから、厚生労働省を志望しました。一方で実際に利用者さんたちの生活支援を体験してみると、自分の無力さを感じることもばかりで、こんな自分に何ができるのだらう、と思いました。恐らく、私たちにできることは、利用者さんたちの生活を支える職員さんたちが働きやすいように、制度面や資金面のサポートをすることであると思います。ふる里学舎の利用者さんたちはみなさん本当に明るく楽しそうでした。それは職員さんたちの優しさと熱心さによ

来するものだと思います。私たちは障がいを持った方々の生活を実際に支えるわけではありません。しかし本研修で見た利用者さんや職員さんたちの笑顔を胸に、そしてその笑顔がいっまでも続くように、自分に与えられた仕事に全力で励みたいと思います。

みなさんどうかお身体にお気を付けて。

(厚生労働省 麻生剛平さん)

杜のホール

伊東 伸之輔

四月十八日、さわやかな初夏を感じさせる陽気の中、福祉関係の方を中心に、企業や地元の方等、総勢三百十五名の方をお招きし、ふる里学舎 杜のホール(体育館)の竣工記念パーティーが盛大に行われました。

式は理事長の挨拶後、職員が作成した法人設立二十周年記念のDVD上映。十五分近い上映時間ですが、皆さん熱心に鑑賞していただきました。中には頬をつたう涙をぬぐう方も・・・

ご挨拶では、千葉県障害福祉課古谷課長、市原市保健福祉部 佐藤部長、千葉県知的障害者福祉協会 中原顧問からユーモアあふれた心温まるお言葉を頂戴しました。

千葉県身体障害者施設協会 伊藤会長より、乾杯のご発声のもと開宴されました。

乾杯後は食事をしながらあちこちで談笑の花が咲き、またアトラクションの琴や太鼓の演奏を楽しまれていました。

おかげ様で心に残る竣工記念パーティーとなりました。また、ご参加の皆様も、思い出のひとつに

加えて頂けましたら嬉しく思います。ありがとうございました。

皆様もご存じのとおり、最近には社会福祉法人の在り方について国会や厚生労働省で様々な議論がなされております。昨年の七月には厚生労働省より「社会福祉法人の在り方等に関する検討会報告書」の中で地域における公益活動、社会貢献事業へ積極的に関わる必要性がうたわれています。



佐啓会は法人設立以来、「施設は地域と共にではなく、地域の為に」をモットーに地元の方との関わりをとても大切にしてきました。

定期的に施設周辺のゴミ拾いから除草作業等を職員と利用者が一緒にやって行ってきました。夏には納涼祭、冬には忘年会を企画し、地元の方を招き、利用者や職員との交流を通して、当法人の取り組みを知って頂く機会を設けてきました。

特に納涼祭は年々、参加者が増え二千人を超える程になりました。これは平成十四年に南房総市に開所した、ふる里学舎和田浦でも同様です。和田浦は地域性も関係するのでしょうか、地元の方との交流が深く、地元の方が主催する旅行には職員も必ずお招きされ参加しています。

そして、杜のホールの完成。有事の際には地域の防災拠点として多くの方の手助けをしたい、今ま

で以上に地元との交流を図りたいという理事長の悲願のもと今日を迎えました。



『杜のホール』の「杜」には辞書やネットで調べると、人が生活を営む上での心のよりどころとして、また、環境に深く配慮し整備された自然のことを指し示すとあります。名称の由来の通り、今回の杜のホールが今まで以上に地域の方々との交流の拠点、心のよりどころになれるような、そんな存在になりたいと思います。

(ふる里学舎支援主任)

お悔やみ

当法人の里見吉朗会長が、五月二十七日に亡くなりました。ふる里学舎建設にあたり私財を投じ、礎を築き、ずっと見守っていただきましたが九十六歳の天寿を全うされました。

理事会や花見など宴会のたびに注ぎ上手な会長に若かった職員もよくつぶされた。お酌をするとすぐに飲み干し、杯を返すあの表情が懐かしく思いだされます。

洒落た寿司屋のカウンターにお二人の後ろ姿。もう古川先生にお会いになったのですね。我々を案じて頂いているのでしよう。

今までありがとうございました。ご冥福をお祈り申し上げます。

合掌